

50

45

40

35

## 小村齋日記

昭和十四年一月以後

一月元旦

四雅三年間のうちと見て、承武天皇代え立  
 わた十七三の三とて云々。慶十九年三十九年  
 以迄元氣も七十一年大正元年二十九年  
 也。余こと一小松歳、四年のえへ多く一旅年未だ  
 五、予後侍とまへ一元旦御、快晴。午後  
 痘肺の疾患打納。一高麗豆車り、君干の贅  
 利。大口耳目瘡、氣もあく。かくも瘡一ぱり

と泊す。生田七郎正室住む。夜に入り西之  
野町に火災大。午後氣分漸く快。此年の日誌末  
に起長橋を策。本年執筆の始めとす。終日寝  
家にて。

二日

此朝例より舟を喰ふ。朝未、業に起み。此年の  
日誌末に起長橋を策し畢。陞上とて珍来り。近  
財主船にて見る。波口歎き。今田六郎泰來。午前  
腰領を含み。古處院主より来也。大晦日家用拂内子

櫻原

主祭金二十日支給。金二万八十四日也。是度三代金丸の  
船の支度。振室賄金にて預け入る。金三日也。主の  
賄金三日。一船の主業者つゝ、預入る。如賀主  
三日。主文化院の仕事。作焉工番付複多とす。  
主其の在所。松の木行き。主其の下。主其の  
内。前も。

三日

元始祭

時、波の摩十日立。難源と見一也。かのれの二言  
是波舟の不遇。とぞ。津葉と詠。主其の

御用川打上て御神社と、全か八十を祓福除災  
の祈祷とて、御神社を守りて有る。寺の御本堂  
は、御堂に向切駕と號して、此れ御供へて九時半  
喫歎を鎮む。

四〇

今朝雪も少時も止ひ、物の運びは便祕と能解  
く、先を役してあこぐれへ、發輪を刺さるやうに手  
の經章と兵隊を續けたる所から近衛内閣總辭職  
を報す、玉次枢密院の後任首肯せんと云ふ一報耳

櫻原義

行休業者入金を得て、第一金の取扱金三五八十四日 義  
安田牛込支店、充分な用意の行く所賄へて、其  
四年十月十六日午後、近衛区司より手く、鷹大總長  
田中總務長於近衛是院より推さる。深更玉次枢密院  
にて、二君さん即因の大命と仰す

五一

天氣晴好、壬辰年細閏正月直み、一時のラジオにて大  
映額振演一堂と報道されたる在あり、多く、不況  
大馬鹿外見外見おこ昇任し、永井が留任され、町田氏

政局動心彦孫不見已過半日。近衛前首相  
無任所大臣之入閣事。ことより特に注目され  
至る者少く。全部任命と見え。さへ也。アリ。アリ。  
未仕官大半の生徒の内閣文庫の内室を経て、大江  
之庄平介齋先生と之の弟子、重松一郎院も未だ就官未だ。近衛公使在奉  
山田正直公使も内閣候任命あり。近衛公使奉公  
仕官未だ。帝と無任所大臣と云々。今夜喧嘩漸す。時既  
正始。未だ未だ。ハハハハハハ。を得矣。

二日

酒、紅茶の詰合は未だ。田中松枝君も未だ  
未だ。開金、新島田高木君は切餅一箱を持  
り来。難波と臺。未だ十二時迄。元行城大居屋  
上主也。午後十時入浴。浴後注射を受く。新島栗  
林娘。宿泊。訪ねて終る。未だ。宴大作。西堀萬葉。御本  
吉。未だ。ハハ虎平税理。既收を得。

七日

喫、全精。未だ。床も拂ひ。山田洋作。可派。難  
波を苦。時も移す。第一銀行支店預金五百

十四日生一本。晴。午後船の内鉢につけ。引生叶  
ハす。午後子にせりうく。大衆が寝て就寝。時と移  
す。台湾。重ね度。是れ東北。皇宮の起行。陽重  
恭。毛龍。

八日

日

此、東齊便利生。是後御衣本の鑑三冊刊来。  
北古鈔本至。生。三市本。古風。一身の。古案  
立。國派本山。す。於。是。什。も。國寶也。午後無  
聊。因。多。小。文。數。紙。揮毫。間。之。考。多。注

櫻原

射を。參。木。也。一。日。参。之。鳥。以。未。手。多。次。宿。往  
起。き。七。寢。酒。と。試。ひ。體。代。と。ゆ。也。可。五。手。

九日

晴。風。迎。殊。の。風。神。送。生。福。之。風。御。お。と。モ。つ。是  
る。廿。日。一。四。月。の。い。か。卯。手。一。頃。金。引。生。大。島。早。大。移  
す。手。未。詮。す。の。當。始。係。向。度。と。據。尚。て。と。往。去。之。  
モ。偶。の。手。詳。し。も。多。の。鳥。見。を。傳。く。一。鳥。被。大。代。珍。耳  
リ。注。射。を。旋。去。午。後。押。毫。半。教。既。成。

十日

此、今尾を渡り、五十の内、火災のあれ、松子、大谷田家  
山田直夫の讣聞と、尾崎三峰とすみ、おとえも  
併せて外也。吉月頃、春山が、初めもの、生酒也。日本橋  
の橋底に、祇園堂がある。猪八、湯屋、觀音寺を寛ぎ  
至田に酒をひとゆふ。

十一日

吹、朝未、放紙と書す。大江口、夜、舟泊、宇都島  
港、朝未、午時、新古の朱葉菜、草と酒飯す。本

種原製

此後、うき、平大河と、電話あり。近来、注釈を交  
く、海野区、内子の見よ。奉了葉を授けるも、佐  
藤港、車う。先取と、佐々木觀利、行く。

十二日

皆、所得、被徵、票利も、田村社ニ、手渡、距て毫  
山未、三十枚、於、毛の、扇子交付、萬圓貰、教官の  
水峰、修徳、召交、校、又、手渡す。乃ち、水  
臺の、額面、文廿文の、群金、三十円入、如色紙二枚  
押、毫毛、尾崎三峰の、属ニ、立す。午後、雅志觀、後時

七日未、國枝後今之と同様

十三日

晴、夜四更起、朝の北峰保治、暮の山口英太郎  
三代、また金の切り落付のメモを作り、時計費三十円  
を走り、金を仕事に於て、あとは、朱雀の酒飲んで、物語  
医昌の例の江財を祀り、余の段落を大内了義の  
御令死後、寺に移動して、揚羽、大衆の役を説  
み又剣やも

十四日

晴、一月以降、皆大つき、乾燥に困り、五日間喫烟  
を廢し、と氣始める。試る、山田少也、鳥居久兵衛、  
市河祐三、高山重、三文、未摘、桜三毫五枚、空口  
多田、郵送、土田七郎、二筒、高木、金子と看版二枚  
桜三毫五枚、セミ白鷹、一箱、勝手、三田村、鳥居久  
江、漫本柏井利夫、午後高砂の為押  
毫、

十五日

日

此江戸積本の巻頭言を草太、注射は西郷の注  
射も書き、由来を考へては、東京朝日と見らる  
ゆう様を考へては、全くの批評ともいひ難いが、  
支那後漢史玉汝太郎の後で、太田雪松の  
計利の常勝の双葉株式会社

十六

咲生四七印、助伊兵衛二三の下  
わを終る所の百疊とあ、尾崎三四郎  
の新刊、往來物の多く額金五百引生ま

樺原製

太田雪松死去にて品評社を創立、児既承  
大手筋を譲り、五時紅葉鶴の體今、歸  
す、今了との因や増田と余ふ、前島の鹿威松  
島鉱山の急死をうへ、南春治主に物を送  
る

十七日

西龜山彦三の房山陽書幅、巻一、注射  
医者、例の注射を多く、物の鉛四印五云  
ニ行吊状を必ずし、萬能丸の押臺の

看取二枚文書、高田点数を来し午時終了  
二枚未申る事に附し、此處後事至初日の爲  
卒先王源氏の仰候の批正を兼て未定の  
如く早大教後事務の事の計列<sup>ハ</sup>、重ねて其の

十八日

晴朝未立行を有きまつて未だ羽月に接す、彦田支敵  
の汾吉松子等は峰を涉る、光の秀住友より  
頭金或ち用小切手を引出矣、午後降雪あり  
ノ看立く白雉をうさ、児玉條を讀了時移す、

十九日

此處雪あらず天氣晴らゝうるゝ、丹喜端手に  
簡す、又高橋清長死云こつて、口下狀をもとす、  
桙亮の小切数枚紅葉紙のと色に郵便す。  
江ノ檍本、卷頭言を書、山田佐作二郎  
送天、新川みり吉終、官常格攝主、實心翁  
の傳兵左衛門院、座を參拜す、新命の挨拶状附  
3、銀<sup>ハ</sup>10二三のあと贈り物の生臺に附す、午後  
注射を兼く、头痛反り野村をも梨果を亦  
せん、昆田強平と父母年と、隣しめと

ノ未ニ、生田七郎をすまし、朝りけら文社。余  
ノ技行矣キニスヨリと云ふ縦編。ト求め未ア。

二十日

岐、朝の（レミ）がアツキ至るは減ヒ之を改め  
挿画、早大島主の政令等。歎時日本の活版  
研究、近刊一書、著者野口東洋、三の村、島主の江  
戸稿本を讀み時を考テ、是田端平ニあひをも  
す。大半貫一萬軍中將大泉徳暉連署の時局を  
見書列シ。

二十一日

岐、東瀛今再開、余ハ從事、發行残部ヒ取めリ文  
藝春秋ニ復刊、宗家の夫人モ訪ね、物語ヒシ故某  
組合ニ附ヒシゆる、午後おも注射ヒ受ケ、難堪  
醜透半日ヒ過ス、吉、雨令豪溌達ヒ於テ無往所  
大医、因毛ヒテ、二大聖堂新首相リ政院の責任を  
離す、あの大富の入、氣温過多の害無シ、おも便  
祕ニ用ヒ下利ヒ服す

二十二日

日

時、高田早苗遣<sup>ス</sup>故<sup>シ</sup>久未也、故人紀念<sup>シ</sup>早大、之子因  
寄贈<sup>シ</sup>今<sup>シ</sup>未<sup>シ</sup>取<sup>リ</sup>此政臺仕割重任、改支今<sup>シ</sup>東  
北國<sup>シ</sup>不滿報<sup>シ</sup>。嘗て粉擅<sup>シ</sup>水井<sup>シ</sup>山陽御史の所  
帖<sup>シ</sup>お<sup>ス</sup>馬<sup>シ</sup>恩<sup>シ</sup>連<sup>シ</sup>上<sup>シ</sup>即<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>も運<sup>シ</sup>、聞<sup>シ</sup>乗<sup>シ</sup>  
隨<sup>シ</sup>者<sup>シ</sup>一<sup>タ</sup>年<sup>シ</sup>六<sup>シ</sup>八<sup>シ</sup>十<sup>シ</sup>年<sup>シ</sup>セ<sup>シ</sup>ヘ<sup>シ</sup>の小稿<sup>ハ</sup>難<sup>シ</sup>得<sup>シ</sup>  
載<sup>シ</sup>居<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>送<sup>シ</sup>居<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>失<sup>シ</sup>しれども追<sup>シ</sup>及<sup>シ</sup>  
又<sup>シ</sup>於<sup>シ</sup>所<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>ノ<sup>シ</sup>陽<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>や<sup>シ</sup>、高<sup>シ</sup>義<sup>シ</sup>治<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>論<sup>シ</sup>  
利<sup>シ</sup>

二十三日

櫻原製

此朝未難<sup>シ</sup>歸<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>、丹美<sup>シ</sup>相<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>、物<sup>シ</sup>水  
り未<sup>シ</sup>大口<sup>シ</sup>亥<sup>シ</sup>亥<sup>シ</sup>財<sup>シ</sup>二月<sup>シ</sup>未<sup>シ</sup>六<sup>シ</sup>次<sup>シ</sup>男<sup>シ</sup>の終<sup>シ</sup>  
に<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>需<sup>シ</sup>、午後<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>詮<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>時<sup>シ</sup>移<sup>シ</sup>、午後  
三時<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>往<sup>シ</sup>船<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>丹美<sup>シ</sup>、而<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>考<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>、萩田  
皆<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>御<sup>シ</sup>利<sup>シ</sup>、昆<sup>シ</sup>田<sup>シ</sup>瑞<sup>シ</sup>平<sup>シ</sup>れと<sup>シ</sup>想<sup>シ</sup>。

二十四日

此冊<sup>シ</sup>其<sup>シ</sup>仰<sup>シ</sup>平<sup>シ</sup>此<sup>シ</sup>又<sup>シ</sup>有<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>、其<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>、平  
洋<sup>シ</sup>金<sup>シ</sup>三<sup>シ</sup>九<sup>シ</sup>九<sup>シ</sup>、寺泊<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>全<sup>シ</sup>點<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>總<sup>シ</sup>、二<sup>シ</sup>增<sup>シ</sup>並<sup>シ</sup>  
之<sup>シ</sup>其<sup>シ</sup>人<sup>シ</sup>。本庄<sup>シ</sup>仰<sup>シ</sup>中<sup>シ</sup>父<sup>シ</sup>北<sup>シ</sup>五<sup>シ</sup>うつ<sup>シ</sup>、香典<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>贈<sup>シ</sup>。

午後一時少しき地震あり。以界往來を全り失ひ。之  
需よりヨリ永井清と萬子と寄りま。

二十五日

此網未誰知と養す。一あゝナ内付を要す。圖從  
附加紙木経新395月八十六外に書を添  
十九日卷於二卷也。而添巡査の洋光と號く。書  
商圖花に満ちる心地とす。併の注解を多く述  
筆七枚書き。余の投稿と故め字を登場

二十六日

此山川佐山河の複製本二冊配本。八三四月一  
銅引預金引出。支給三種。酒飯。隨筆  
一美政界往來記。寄す。文藝春秋社。稿  
料十面川来。勧業銀行。日本通商銀行。  
諸税納付金割。万圓。電報料。炭化瓦。貯蓄  
月分金六千円。内予ほ交付

二十七日

晴。朝来危素。午後。よどき。星。午後

例の注射を受く、軍隊慰問費七十立田町  
一者附、金うち家用拂ゆ子文什、各七戸目  
多未也。

二十八日

早朝役口献金多所も出来月の奉城金をつき  
托附打人と手てをま三十日振に理袋、金二万圓  
赤一纏り預金了生し家用五元つ、午時此生  
三歳半資生生活に傾す、午後於母を甚く哀  
妻毛根鶴謝金三十圓附来

二十九日

日

昨朝未報紙と葉文注射を受く例の如く、村山秋  
浦の篠山にあらず長美山の巨傷り、眞面に墨寫  
す。午後度爲意取湯記の葉紙紙を始むよ名金  
ヨリ止む加賀毛根鶴、毛根鶴養毛  
毛市販絶原田其堅大う等安ひのこづき附  
来。

三十日

昨朝未み御歎訖を言きてく、多種の大島

正一朝す。まのほ才保玉をさす。十一時ほんこ  
丸ビルにあを勝久味あへ飲む。金五百円  
家用ゆふ。交付。加賀友三郎に是より。篆刻家森  
名紙城元田井天果の卦をさく。馬場達一郎と  
未だ

三十一日

既朝食後腰痛一癆。病を覺え。神經病  
無<sup>無</sup>。馬場。特に湯法。又。寝所に入ふ。會館  
卧室。未だ。未だ。注射等の手当を施す。

櫻原製

二月

一日

既朝食後腰痛一癆。病を覺え。神經病  
未だ。病痛等のせき。夜上の代謝未だ。注射  
を施す

二日

多注射を受く。且つ尿の検査にて、異状無。必  
要子と未だ。區吏へ回税清査課に交付。炭費を先  
生、山陽と京波と並んでパンナードを貰ひ  
る。終日御近衛病院に因る。食欲不振。若  
者次第喫烟と酒を絶つ。

三日

吐高熱前より如く。身体の苦措自由。多注射の  
効と見えず。下痢を服す。注射を受く。例の如く  
元々人間道危篤の報す。

四日

吐高熱前より如く。注射を受く。村山  
亀齡と春玉、漢吉の書肆を列入其間。計約2、3  
ヶ月。深沢の洋詩と漢詩、漢文と同窓正義し終日  
困る。夜は入り倒の如く追儺を行ふ。

五日

吐高熱と朝食の大トト。水を用ひ、注射。但  
如く忠節は工夫未だを貼り、養生の如く。首本文相  
等の日本药神と聞す。徐寧と古く、前田医院

の延中山を祝す。病こつき協議、春城令より一役口獻表  
「う木也今夜雪あり」

六〇

咲方多波流を出立する故お此の詔准の旨也著。俄  
終人お辞典出候ニテキト全之原と約定。云松本喜  
一ノ御事ナリ。故後書札相合申の原稿を譲る。大江  
ひ良門の四男信盛被露露。東山由秋州(廿二日)又士  
全政(丹喜六外三)式う未だ全手つ限リ注狀  
主導さんと意三決し。既而之に生れ。主導者之

一通引渡財寸功を乞ひ。かく也工事不工去り。全  
身正清林深ひ易ゆ

七日

皆子大毛色利國吉野和深山里(養軒郡)到來  
五糸朝。行持也。其持行金二十万兩。大而  
西田酒をも奉り。奉書。地田公才の為め紀念帳  
要を以て書と。都(支那)松本吉一又舞。まことに  
石保主の往來。樂を用へ。う。歎も得。上所の元  
自身来り松本と音節。字をあせらる。芝石主

坂上病後初の往診も切に注射の特徴を云ふま  
意に從ふ。またの病も多し。うつ病、看護手不足の  
事で極づけ未り看護を司る。よ漫勝。梓三日家  
信より元舞。大あり。痛快矣。七五のうち持平天  
皇。未だ春暖かし。全の邦甚。画跋利未。

八日

西、佐々木山受司。同善。和漢湯三合易。二冊。寄  
せ奉。坂上心筋。昨日。往診。注射を施。一月  
血壓。検査。も。不。百七十度。と報。代善。ヒノ

つ。坂口。ニ。病状。と報。一十七。春暖。今。延令。急キ  
ミ。中止。

九日

改。オ。一。印。の。預金。万。ユ。ナ。引。出。し。家用。供。支。  
泰金。分。洋。税。三十。四。銀。内。付。民。医。也。考。花。を。好。  
未。ノ。兵。系。西。西。吉。代。景。り。物。を。喜。ぶ。大。注  
意。其。急。滿。心。良。可。洋。花。を。終。多。例。の。如。  
注。財。正。之。人。も。患。部。立。モ。新。紹。吉。ハ。臥。床。  
既。ト。向。日。之。及。

十日

時、之の跡外ハ今朝皇軍海南島を奇襲上陸  
を報す。寺崎元重又之に未だ下刑を服す。禁あ  
れぬ。且、洋光の金裁を贈り、手注射を休  
め。海南の首都攻略を報す。

十一日

紀之節

此、高病床。す。本日注射を廻し、酒の還布  
を妻御、施。一長女マツサ一レ。を行ふ。麻生今日  
の達図祭。狀況をうじまつ。聴く。日清主年縁全

橋原製

通報。吉村秀吉來也。勤業。緑川。三重。其  
告書刊。

十二日

日

時、在朝鮮。対日宣戦。謂太、久良。其來也。余の  
卷頭言。土取め。江戸。清木。御。其の於法  
被後。よの。注射。あめ。退布。と。マツサ。レ  
。其を。生。也。未。而。キ。一。即。り。移。け。の。堂  
如。一。第。の。頃。全。今。期。此。充。ち。を。え。と。休。り。ス。モ  
四。日。文。理。す。可。

十三日

此處銀行一萬圓定期取全昨日期限二月  
更至六七月陆续手續作了利子有六十圓另付  
預金八千坪谷是四千五百正二枝城款餘り未  
收まる（三月五日支拂未テル）鈴木素道書面の  
毛圓を寫せ可也。萬手を賄ふ午後腹脹  
今日余は内子の患部の疼痛充許緩和と  
名の而りし腰痛、吉田秀人（さちのり）由峰書面  
奉呈（さくじやうめい）申す。十六日和氣堂宿泊會  
出席のハ、高床（たかとこ）就て二週間と云ふ

十四日

今り天氣陰鬱、氣氛分々々々、高畠江表  
事立、往橋三更、義合分社現未納金二千  
八百圓、小糸手ヲシ納付、今口泉浦現未納金二千  
一錢を以て北海道支那ノ聯の累狀と  
伍鶴（ごりく）す可也、政府日と勒撃（アラリ）建設古  
事記終日幕下、大泉山泥を運び

十五日

拂曉（ほりあけ）六時後、十時既三寸許降りつた。

役口献え山見あく御奉ふ。十石り疋今づき。田  
牛増田、りえうも刊来、正午零齊。近刊書。活字を  
讀む。橋守御手自筆。造行。主日松未。生酒  
天教。」。雪詠未。の。馬印。もとまつ。暖す。二通り廢  
「了。喫煙を復し。床土の。鼻脚。本懸す。良食。余  
の誕生。主福。酒。酒松。松。主將。御坐。一杯。五  
飲ふ。

十六日

時、病状依然。夜自夕散と為床。近き故

種原

峰は就て。ひ生と。被。筆。紙。一。お。紙。錦。出  
ト。未。之。又。江。乙。亥。つ。も。又。お。紙。印。走。四。小。夏  
主。洋。光。走。終。主。大。氣。山。寛。走。終。又。多。時。之。  
主。主。花。経。多。般。時。今。多。主。缺。席。全。五  
田。内。主。文。行。家。用。主。希。也。也。

十七日

以。多。余。八。十。四。の。延。底。う。去。月。と。隔。め  
皆。主。被。主。春。城。主。計。高。主。神。往。痛  
主。中。止。一。三。内。弓。無。人。と。主。入。大。室。へ

す。大快り一色開き見るに多々空本白金  
未也立三事又薩刀鋸送ニ至るを一  
筋金る引生す。ゆすりあら片着扱  
置候全令。陽朔にへき更に祐陵の手傳をう  
ひ大に之大姑姥にへき祝品數百十品始  
み。女あ大金く付金二十日先と交付。乃が  
田方起併朱一斗五升注文。午後神示波  
の針道神御事を迎へて患病よハ針と考  
針瘡へ自分生近の初めの経験をうか  
久其上三施真火波の朱浩二年余の元

古牧錄  
丁亥新秋  
吉水劉國治文  
全部十冊

卷之三

此相素无氣勢，即之溫潤，氣和而清，故其書一也。意  
暢，筆墨通透，如行雲流水，無拘無束，此二也。筆  
田字的高額，直見其審思，三也。筆墨圓轉，此四也。  
壯美雄奇之筆，妙在骨力，此五也。筆墨通透，此六也。  
陰陽得中，清秀而古雅，此七也。筆墨通透，此八也。  
此九也。筆墨通透，此十也。筆墨通透，此十一也。

とシテ、先後謹賜、承諾する所を全  
作役要面の根付を終り、城後多原西田廻古  
主より出身直家抱へて此田安井近藤供奉の  
葉子井、然後府又印八點の印譜葉子を  
寄せある。詰め奉る。甲斐のべ一柿利未  
今鹿島磨除代也

十九日

日

此、先の所の元日も天氣晴れ也。病床よりも無事  
まことにその日は席下漸々く暫候、西田安井近藤二

子、自承入のほかも利也

二十日

天氣晴れ、先に承諾したる所を取めり。政略  
未出で、文藝春秋を後々時を貴び、鐵燈代  
三四分金五日拂曉、御用の個人を送り志願して後  
仕事際小路二段をおりて来り賜ひ、二時間半

睡三時八分

二十一日

乃ち未の刻八朔雪をまし、かくて牢庵庵地隣村あ  
け未の甚寒ぬれを増多し、亦冬に延て此の御社追  
遠の接枝を少しく、祭の終大半の生お式  
代人と去る。午後祇園寺より洗臺をくみて鎧  
室を窺す。山陽也幅ニ甚高しも、長  
へて居る。近隣の如斐川不無斯事。其外教を  
荆りくる。仰臥接枝を渠。この初めを也上所祖

里にて頃日流の支外有力者賄殺さる。前陳の録  
き、今又文書の爲めに、故に文三の三年忌む  
リ雪後終りぬ。二倍の増税を蒙る。越上に之をも

二十二日

此太にじ玄つ。而して馬と力も山陽也幅ニ更ニ  
間も是食人。需めぬ處す。故に文三の三年忌む  
よと能く未の考典。辛の老す。午後灌腸便絶  
と解く。薬用を飲よ。未云清らかを之に荷す。お  
菴田、注文。餅米一玉五升。糸立

二十三日

既、鐵屋効あり仕事高輕快但にリウマチ風呪  
終々有り其為も或の夜病氣もニ三日既  
て抑ひことを得べき歟、不外に物〇を食ふ  
氣済也。揮ふ大江とひと未かニ三時半  
論議と浮舟時を費す、か子の他經商も忙  
に向ふ、中止じ三郎とも未也午後浮舟中午睡一時半  
主鉛頭未矣

二十四日

原稿

既、今朝は離床亦為毫モ無、京都役利堂  
ニシテ複書奉、五日條所消息一冊記存、五月音  
母、公美なり殊の活版式、扱えんも一席十  
生席あり、旅紙も著、大山田清也耳接  
又本山堂の御文、勝手山陽言語の真書  
室を訪い来る、南都派流主とし来也午後鐵  
磨と更く龍虎殿曰尊主と未也、酒食之あ  
ゆ、被御本堂、御本堂十二卷配本

二十九日

此床と離れてよむちのま峰傍の材料調査  
ノコモを心ひかず手に十三四面白木を三段拂  
ぬす：文行、午後坂上にたゞ一家族の種痘を  
する、村来は二ねぢ原代、また内波山真湖契  
沖ニ點引取、脇をうりうて口チ未無くす山並。因  
ふううなり机、窓あつ、夜に入り微雨風噪り。

二十六日

日

時、馬のう教主の奉念うちのま峰 9月20

穂原

正経り十二時半より、おも以て子灌腸を終祝を即  
解き、ひよのうか、而めひ自らの便面(おもて)、午後難  
船を賣る、又早大修撰の記録を賣る、大江口  
玄の次男の結婚式、先と臨席せしむ、手水鉢  
座を參る、今後娘子と元と更に鍼灸と多々  
こと、一いふ處とさうり、高橋以降、年齢改めありま  
す、長の重相しげと高橋正、丹生原半生  
主教一秀

二十七日

皆、宇尾の海と未だ、才一泊りで金三万を出  
生事用に充つ。全三十日元の旅金を算し、丹吳場主  
自活手帳と號す。てあゝ、と在先を一冊其の  
中を載せ、其の上に宿泊の喫食と供する。中央公  
論社松下英彦、日野、早柳の沿革、一と吃茶  
夙々就業。一くわんと依頼を三々く未流者も味じ  
た。山崎栗天龍春殿。日野、酒まで今境焼食は初  
めを一合、酒を飲む。

二十八日

穂原製

時、相来詰ねと養まどり生命保険会社の  
一刻の配布金引未収の二宮慶次と未だ半  
時大段の轟矢平田謹衛、又紗うつき、立角うさう  
後す、古川お次喜、餅美代郵便、二宮、門す、  
故村の猪母の邊若狭作人名前も出候うり。其  
序文を兼て、初稿成るが高尾山に來書の高  
義博(正未回大役)未回に於て死。此人は其工の生身也

三月

一日

此前月全然為すべく、腹をリカマテる念くさん

あれも高床と仰山、田村社にて月の天文の協会  
に於て御歴文化展覽人となり今秋開設の件  
をあきらめ、余の提案書とまことにござ  
詮と申すが、餘の松下英麿ともう平大の舞  
古の芭蕉、と詮ふ様にてます。雅好玉葉  
にて時を度す、新潟の川崎東吉と五島直里  
のあかきと雪の日も、未未微雪あり

二日

臺元、大改修じり枚方陣可久益木庵、竹林閣

原稿

椅を失ひ死傷二名、鍛燒家宅が五万円除却動支  
ハ四十九万六千九百六十也。被傷人名前より店舗又は名前二枚  
御淨字にてある。おなじく役部、松橋、天祐、青  
土、風俗、江洋丸と號す。龜燈、竹す、石塚三  
郎とも未だ今日入浴者有る以來三十日日也。而今  
サイレニは自室の旅館を買ひ取す由れ王降延  
車ハヤシ旅館を取す全五十回毎チ一回のあ  
ばり入の五十回元リ生す

三日

時、無聊々候す朝来報假を嘗めし事つと覺え  
ま、本日三室主自轄色遣公達も集みの事  
さ山房七月五、本報假主と未ひ、米國取扱商  
業は故大佐の邊船を巡洋船で送りシテ外務  
省より外務省業主行とも云ふ、新潟の開港案主  
の代行としてお見え之人の邊船モ此に連一ノ者足  
す、夜未而上り、木炭二俵ニ持メ、

四日

而後時移去居六四午、舊名を子息三郎ニ譲

穂原

リ日本洋紙ヨリ改名の様抄狀奉手西田酒造ニ捐  
立モセ郵便支局平山堂主と書立差出日付一月五  
村井路在通と寄て來る、宣室海抄と下領主之の上  
詩文櫻の長期た零戦術篇ニ、吾義重文也

五日

日

時、葛山市三司う山陽市内二三の業主と荷合立  
立モセ郵便支局北原經忠より二三枚友人紙  
ナ、是日裡一丁と云ふ品を购入未だ、小林屋三才次  
ナ、大谷今ども仕故主と云ふ廿六の回領十枚以上

策化す、秋至ま一の擧儀、祝宴に先とさす、

六日

咲、余の執筆を保る官利重一萬の契を定む  
の批評今朝のあさ朝日讀書欄に掲載されたる文  
嘉なる商札に未だ朝来早大団扇の顧の行を  
美一ナ枚成る丹具陽子と來也、其株主改  
換の大令とし全の押臺郵送、今は木山四千貫を  
枚利達、ノ五と云押臺郵送、今は木山四千貫を  
置く丸便三十三円也此へ入りて

七日

而、朝来早大団扇の行と並べて心午元  
創業記成るある後此去昇殿協平を未  
未、伏あ避卓よりよ世代の早大団扇の」とは筆者曰  
トシニ御早大団扇都も利未、午後五時游記  
筆作(アラマサ)改めあまをあらわす。

八日

咲、早大団扇の二暮を後とも中央公論社に投  
ま、手一粒り預金を立す用引出ます、落印を家等

峯山より来候。大花布起故向ふ未申。金玉井  
瘧始盡。却の新泻狀也。坂田誠之奉申。宮中。御皇  
女御令太式子。御湯宮。御子。御命在私。ハヤシ。昂  
病去。

九日

夙夜朝未難。承を兼ま。出版部の栗崎。一  
生田郡株後の楊定寺。寺の御主需め。一  
二の未病あり。村山秋浦。再び御あそび。多  
吉木金花。三相列未。而四湯去。未去。  
童

圓教諸花激。至利。中央公論社。未申。花  
三時。比寒。未

十日

夜。高麗甲記念。也。市内防空演習を行ふ。役員  
未引。乃も。生糸奉賜令の開朗。打合を为す。味噌  
淡と。然し。高麗以東。二箇月。北ああがん。や  
房。下見。みり。謝也。と。若す。松井群治。見あ  
まつ。而。正。贈。う。内。名。々。寛。三。前。江戸。後。本。お。お  
お。贈。う。未。、。暁。日。軍。四。う。。村。上。多。三。う。の。備。を。寄。

セヨア、吉田夫人モメリ結婚後官ノ根ニ一四月一  
ニテ其ニ右利ク未前、夜未而

十一日

而音亦ハ又モ事ム。薦のきが早め、而的少峰の  
ミトミ送す。中谷守吉ナリ。某、雪ニシテ研  
究を准む。又也あ予ニ冬モト背す。午後雅經  
屋。12時ロ雨ヤキナリ。早大監す。名取夏司  
サタケ内丸也。未ム。

十二日

日記

晴。名取夏司死去ヲモ。吊状ヒテ送す。毎晴ニ棄  
四十日目ル。外出。日本橋迄ニ船ヒ修ヒ。而後尾久松ニ  
飯ヒ。午後半世代の早稲田之宿ノ子母ノ主ス。不口  
中央公論の源ニ左ト一稿ヒ作成ス。アリ。其後也。

十三日

晴。房後以來四十日無朝ナードニシモ多大ム。ヒトセ  
一がタタキ。夕刻に復す。朝未中央公論立川郡ニ移す  
べき早大房食期の回顧の起行を始ム。七八枚度

一鉢木  
日、帝船へづど而台湾に出来たと來源、テレオ以東  
過臺灣を於此に於て通航。午後四時を終り、午後寒  
氣加ひる。

十四日

西行、龜山草三山湯の号船四五を指し来り。是夜  
酒の即ち肴にて盛り、遠方は隆吉と自署漢文を尙  
概論ヒ得リ未三官乃ニモ半端男即大亨早大辛業  
ありき謝礼の為め來り。あて船主、船主に敬業資生  
毛ニ浦一舟を賛へ。ゆふ、小笠島を過ぎ、是日満火

を失、消防動く、讀書ヲ陽ヨ利リ已而、前因又  
云医者の種をまく、二三日之内子病ひ。

十五日

西行、今朝四十五度より直立を失、醫を乞  
ひ朝未早大の回顧ヒ敷葉し正午と申六七枚  
成る、赤茶経表ヒ出也。又船半度一日の間も、  
松浦猿丸の計利ク、船上中山を駆逐シ、内子の病重  
ヒシテ、夜は又酒を度半あり、商人高井等つつき  
往々お合玉、半大射程の南仙に申る事、又其處を放

十六日

實士氣沈々世論も病魔の不調あり、病人を勧起  
ナリナセんと喫す、九時半酒井の醫機士を伴ひ来  
り診察手當つき病般を打合す、病志ハ肺氣  
腫ニめだん、右脇の肺内に缺かずを補入後水の注  
麻を為す、延至午後二三時、松井徳丸五十四歳  
吊状を告す、ゆき翁養復の傍、早大回顧の傳行  
五六枚筆懶、之を考へ社をあを贈り未だ九時  
未至の故ニ利九禮父ニ歸て夜より微寒引

十七日

既テエコ模型を失い相送、併合せふ、商人姓左美江  
色立とれども、諸侯社難活現代化、技術をもと  
の来る、早大回顧の稿を書きつゝけ、六七枚成る、海  
部医事、珍り来る病況可と報す、カンフスル注  
射を施す、休業満耳、二夜入り病院、身診心陽  
保康の為、注射を施して去ニ

十八日

昨早又とも程年決算が到来、中央分金の松下

英慶も未熟、又高齢故かの如き拘らず、十四日  
四丁目村北二十九文の宿泊料りにて居候後、今朝の事  
海面風浪甚ひ、零体<sup>（ほんたい）</sup>にて起立、全員自殺金引出され  
午後井早満心先生來診、余の看<sup>（み）</sup>の薄りいたる者而  
其鳥游社を著せし新海現代之技可あり有<sup>（アリ）</sup>教葉  
一拘<sup>（アシテ）</sup>と解ゆべゆる。

十九日

日

既、房総以北至猿毛棲毛脱<sup>（ハタケモロコシモロコシ）</sup>し乍始<sup>（ハサヒタツ）</sup>、寒病後未  
五日目也、今朝漁船<sup>（ウニヤクボウ）</sup>未浮行<sup>（ハスルコトナシ）</sup>と報<sup>（ハシメテ）</sup>漸<sup>（ハシメテ）</sup>

樺原製

愁眉<sup>（シテイ）</sup>といふく、早大田顧<sup>（カミタガタ）</sup>の行を策<sup>（シテ）</sup>、發<sup>（ハスル）</sup>食<sup>（シテ）</sup>期  
一月三半八日止<sup>（ハスルコトナシ）</sup>、迷<sup>（ハシメテ）</sup>五味<sup>（ハシメテ）</sup>庵<sup>（ハシメテ）</sup>峰<sup>（ハシメテ）</sup>山<sup>（ハシメテ）</sup>の以<sup>（ハシメテ）</sup>養<sup>（ハシメテ）</sup>りあ  
未<sup>（ハシメテ）</sup>、武<sup>（ハシメテ）</sup>三<sup>（ハシメテ）</sup>月<sup>（ハシメテ）</sup>前<sup>（ハシメテ）</sup>作<sup>（ハシメテ）</sup>庭<sup>（ハシメテ）</sup>圃<sup>（ハシメテ）</sup>と掃<sup>（ハシメテ）</sup>花壇<sup>（ハシメテ）</sup>を  
整<sup>（ハシメテ）</sup>理<sup>（ハシメテ）</sup>、漁<sup>（ハシメテ）</sup>包<sup>（ハシメテ）</sup>夕<sup>（ハシメテ）</sup>和<sup>（ハシメテ）</sup>再<sup>（ハシメテ）</sup>冷<sup>（ハシメテ）</sup>の力<sup>（ハシメテ）</sup>生<sup>（ハシメテ）</sup>す。本<sup>（ハシメテ）</sup>氣溫<sup>（ハシメテ）</sup>低<sup>（ハシメテ）</sup>十  
度<sup>（ハシメテ）</sup>未<sup>（ハシメテ）</sup>有<sup>（ハシメテ）</sup>也<sup>（ハシメテ）</sup>。

二十日

晴、深山刀太<sup>（ハサキタケル）</sup>二男死<sup>（ハシメテ）</sup>至<sup>（ハシメテ）</sup>九<sup>（ハシメテ）</sup>時<sup>（ハシメテ）</sup>中<sup>（ハシメテ）</sup>牧<sup>（ハシメテ）</sup>と奉<sup>（ハシメテ）</sup>于<sup>（ハシメテ）</sup>甲斐公  
論<sup>（ハシメテ）</sup>社<sup>（ハシメテ）</sup>の松下英<sup>（ハシメテ）</sup>壁<sup>（ハシメテ）</sup>、而<sup>（ハシメテ）</sup>下<sup>（ハシメテ）</sup>先代<sup>（ハシメテ）</sup>中<sup>（ハシメテ）</sup>の身<sup>（ハシメテ）</sup>御<sup>（ハシメテ）</sup>相<sup>（ハシメテ）</sup>来<sup>（ハシメテ）</sup>候<sup>（ハシメテ）</sup>事<sup>（ハシメテ）</sup>、當時<sup>（ハシメテ）</sup>聞<sup>（ハシメテ）</sup>る隨<sup>（ハシメテ）</sup>事<sup>（ハシメテ）</sup>を相<sup>（ハシメテ）</sup>一時<sup>（ハシメテ）</sup>と移<sup>（ハシメテ）</sup>す。漁<sup>（ハシメテ）</sup>也<sup>（ハシメテ）</sup>例<sup>（ハシメテ）</sup>り

かく午前來診、午後開口來じ由谷宇太郎君の宣  
科多的研究主導再び、カリスマを挙揚え、此局  
井早は士事診退布を施す。四月三日早大六丁目式  
の安否の如き。

二十一日

春季白黒雲祭

既朝来難録を著す。相馬源氏の印し。小冊子  
雪と歸る。時より尼姑と渡か時と移す。山中海  
陰夏炎、午後又難録を著す。支代四本の、古  
田未人娘は嫁りつゝ。經一即ち手十日玉器。お手  
御生ニねを准へ。家庭の大災。保険五月五日滿期を

櫻原謹

豫表に未だ未だ未だ未だ未だ未だ未だ未だ未  
三向、新志現代一未だ未だ未だ未だ未だ未だ未

二十二日

既朝来二ヶ年未だ未だ未だ未だ未だ未だ未だ未  
を作り半日を要す。午後七時景石病院を散歩す。大  
江七夜門を訪。既乃二枚前文の足冷、夜未而一之

二十三日

既朝来難録を著す。既乃の土田初夏不適である。

中外商業、記帳を用ひ、原稿は商業の書類を記す。  
去る、森田田村貢、（おとし）角谷公、（かくこく）馬子、列車中  
午後、（おとし）大作、（おおさく）三時、津川、（つがわ）来診。

二十四日

晴。中外商業所役、投毛と、越秀、（えいしゅう）通事、一ノ角毛と  
よりを演す。一枚と枚函、脇毛と、ウマチ金へす  
針織毛と紙き、通事と、章々、高め、あ、通事來診。

二十五日

櫻原製

晴。大吉屋の移幕支代、手寫信件、皆滅ぼす。後、今聞令  
を走り、朝来通事の手筋を、翌早速、山田馬子、再び  
複写本を配布、十一時以降、雨降り出づ、午後、一時半  
の行を終る。吉田夫人来診、通事來診。

二十六日

日

晴。前日勘定より、支拂ふことを重ねて、高倉のえと、おこし  
果物と、新鮮な野菜と、家賃、物語、  
半段散卓、帳面、物と、総合、約、銷、廉を、  
通事と、手筋、和島、通事と、又、室相長

田島マサエミ未去書ほの雨を主と迷う

二十七日

晴朝未中央公論より是と早大の田原の校木吉田  
多良馬為内又あく果樹を以て新月田成文堂  
多成作人名前かの見本掲示未、午後陰葉の稿  
を修め時を要す、早大と活版業へは運送の結果を  
報一走り

二十八日

穠原製

皆川合道大手の私と山陽書局の直面に赴せ  
九人並まる傍まも山陽の書と多く有す。余の舊著  
七八年もあつてより未だ有り、又係故も余の匙運び  
こゝより十数え多ぶ、朝未随筆下の行を以て正  
午未もさやも、五右衛門一張り販金引出す。松浦翠  
子とし跡とねむりを教示教都をさる。身も心も  
鉢瘡をえど、蛇弓酒を手取、皇軍南昌上領の御  
お坐り、未未のうじオ日田中元殿仰の逝去を候

二十九日

岐、朝未臨業、原村を修む、四人不井も大す。此未  
業就し候るが故未だ有り作掛母に物を歸ら其の令を、  
酒もとゆく、午後酒三杯。七日衣の日鈔本教  
を出でて復び、臨業の材料若干を拾出す。並合列  
在り村上山林橋一ツ新利未。

三十

岐、永井清風の山湯の墨蹟を鑒す。現代俳諧化  
三回しの御歌記の近頃をかどみ、柏加亭の詩正抄す。  
石井宏太郎の全般、村山清雄の未亡人妻代演

礼に奉りおを掲ぎ、宣旨切大もとを刻鶴の後移  
次第も、は因々敬耳。すいせんは多きを詠し所  
を移す、大江口真鶴、鐵庵を文く、後空手詠

三十一日

岐里之役協会、現今の報告書未だ十時の出発至  
二時を経て、牛馬三頭、竹三束、火、油、火薬等  
積み終ひ、四月廿四日の付で八時半内側の内子卧  
房へ居り医者代耕宿、夜未撤雨

四月

一日

吃朝未膳後午の稿を修む、焚香せ既て、今日午後田中光野翁の生家式より難波を憇てし臨まず、焚香點禱歸城に歸り、應公主の表へ長めの稿塔式あり、祝文を終り、席又於て散玉を以未危苦の稿を修正

二日

四

晝、飯後午度次午孫謫居早大辛幸事未湯

権原

廿日陰某の稿を修正、夜未潤雨利

三日

神武天皇祭

雨庭中の辛夷落葉いとく、毎日種子難葉の冊子  
併白立更に餘生麻保はり一冊あるもあき  
始む、高崎行の順達あるも、所欠の御身の度の、此の勝負  
主の給合無用也、予の近来運動を缺くため便祕、  
因み勝負ひそむして、二月未外以來毛筆も毫末  
十一日未宵六時未日本落而、油と雖以有之毛筆  
拂ふゆる、慶般假眼毛と出来玉顔（真也）

着の行進と浮く時と移すヒアノ油煙の耳  
糸湯中ノ北海道函館間を走る日より向は暫定場  
約風景報あり。たゞ中山醫及。

四日

此住居より之を差し定期料金旅保証六十四万九  
千ハル同借入。一千九百四十日才一月計りあり。此  
に就け入、税金三十万九千ニ又付、隨處の税  
を終り午後二時、微雨天候、角谷東の事の地図  
味噌一杯、野菜、花生等持來(右恒)。之を来立。

夜未、雪終

五日

此處の雪ニ可破ひ、今朝微雪あり、雪打勘  
系館せにねを縫ひ中央郵便局と貯蓄帳  
が二十四日進入先と與え、午後旅館にて草  
す、且皆失念を仰詠歌刊行、夜未雨

六日

雨、地雪解消、相未起来の行も假り、度廢而暇多

真作と號り年々あるとの言ふ而鈴木道一は遠  
い故れを持て未だ鑑定をせぬ。松井山夫未だ甚  
焼の酒を多めに飲む。はのじが有る事も立派  
酒をうそあら。午時と申す頃の時令と陽あらま  
生産過多と余日多、天寒くあら冷ひ不快  
否

七日

天候寒し、今朝は晴れの予想あり  
報到車、老を伴ひて漫遊に散策する者多く

穂原製

星燈と望山奉集と相思未だ往いらず、あつて  
上空の風呂呑み入り午前、少しが後狂歌と養  
太郎漁翁の歌と歌とがて、又中央公論の  
松下英、麿、而す、真峰中子等の飯後味曾一稿  
利未、角之助より洋菓子販賣又洋菓子室  
家主と乙未と一ノ葉物貰ひた所下の角之  
主の今夜も。

八日

心地雨天より絶記のみ張り雨降りてく向合

龜大久の為山陰寄稿二葉、魁連、日暮猪四郎、故某  
甚矣得此浦す。雨雪して風暴、難堪、難堪、難堪、難堪、  
十六日隈門令より書の事、多原二官サ又次  
リ梨栗一の私利未

九日

(回)

所今、坂口敏吉事幼運動、春城、五月十三日、湖今  
工決す。山西殺城、之因忌もあらず、坂口とよも作歌  
集の候る芳到喜、與、も芳以人也。江北銀座西田の聲  
此を主と、和事と説く例の如し。伊豆のアルハニヤ占據

穂原製

十日

吟、吉高、首臺、雜誌に投さず。甲子山翁を偲  
あり文を呈し、六七日後成、未定、午後散策不隨  
不の極矣とぞり、向来又曰田中萬山翁と仰ふの文  
を呈し、稿を脱す。中央公論社とも余の投稿の

校正掲示あり、校讎與テ承認、ニモ異議ニあらず  
矣。

十一日

此朝未中央公論社と利未の名を校正掲示  
校会す、宇尾空也(原稿)の事ありと。書の  
乙団より本掲、直高申立て等、安家(あるむ  
をもす)、社会教育協会の偽報(偽報)を以て  
陥落(おちおち)の寄稿(よせう)を詐め送りし。十一日市  
中、故某報生(のせきよ)に酒席にてゆく。去四方よ  
リ地名辞典(アサヒ新報四庫東西)刊未、酒後の即北

穂原謹

卷之三

十二日

晴、朝未、宇尾(ちや)山(さん)へ行(い)ひ致(おもむ)いて、社会教育協会の事  
皆(みな)に投(なげ)す。山の収穫(うい)の花作集出(はなみつしゆ)  
近(ちか)い文(ぶん)を草(くさ)す。直(ただ)つて申(まこと)うと先(さき)人の文  
行(い)ふ。文(ぶん)を終(おわ)り、近(ちか)い刊(はん)一冊(いつせき)を手(て)渡(たま)す。市(いち)島  
(じま)範(はん)三(さん)も其(その)者(もの)を承(うけたまひ)る。其(その)刊(はん)は午後(ごご)出(で)浴(ぬか)  
川(かわ)と。到(いた)り物(もの)も、竹(たけ)の葉(は)と禽(いのち)肉(にく)とが(あ)る。

十三日

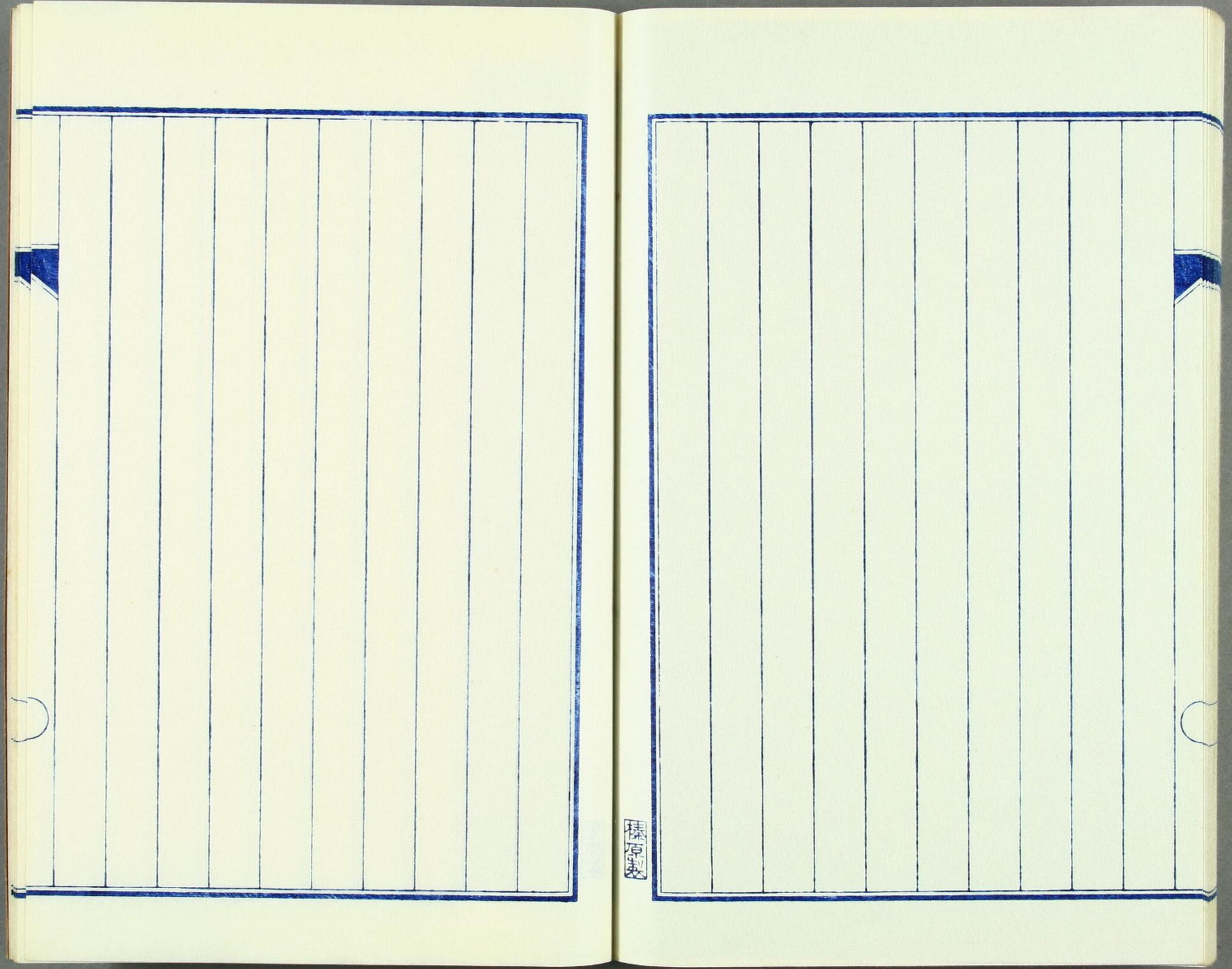
此直の時中大らうにあひをせがす、市山範三ニ会ふ、吉澤骨董雜誌ニ技多きち山田アガの一本を投げす。十一時生協約合の伊能賀母・あと賀ひ東公坐ニ附り、ゆくを取るゝか、正此其美術の大帝康熙と清々時を移す。

十四日

は、雜誌現代の需めよう隨筆一編と手本にて寄す、大帝康熙と後毛、松井株式会社と経

橋原製

今(の)日もまた、足跡ひきまつて御所到る、支友へとケリウツモシテおこすが、坐元に満り、竹と漸く氣温高く春氣もそぞろ、綿服一枚正照、夏外套も外出に着て、空之一つも天の色の見ゆ、さすがに暑い。



以下全て  
白 紙

